



【編集後記】

ICCS 電子ジャーナル創刊号をお届けする。特集は2009年12月に開催したICCS国際シンポジウム「現代中国の国際的影響力拡大に関する総合的研究」である。ここに掲載された諸報告論文を軸に、さらにこの問題の議論がより広い範囲で展開されることを願っている。かつて「近代日本の歴史は、中国認識失敗の歴史であった。そして、この歴史は、現在もなお、基本的に変わったとはいえない」(野村浩一)と言われてきたが、現在においてもなおその「失敗」を繰り返すということは、日本の「世界認識」そのものの跛行性を意味する。「国際中国学」を標榜するICCSが、学的研究対象は、たんに「国民国家」としての「中国」(実はその存立形態それ自体が大いに問題であるのだが)ではなく、まさにこの「国際」大の相互影響下において「天下」と同義的にイメージされ現れる「中国」をめぐる「国際学」でもある。この「中国」が名実ともに世界に覇権確立するには、温家宝首相によれば、あと100年は時を要するものと自己認識されているようであるが、米中の文字通りの狭間にある日本が、いずれかに吸収されて雲散霧消していくかもしれない緊張の中で、物に凝滞しないよう、われわれの学的営為は続けられていくべきであろう。楚辞を残すにも、まずその歌とリズムを忘れぬよう努めなければならない。(SN記)